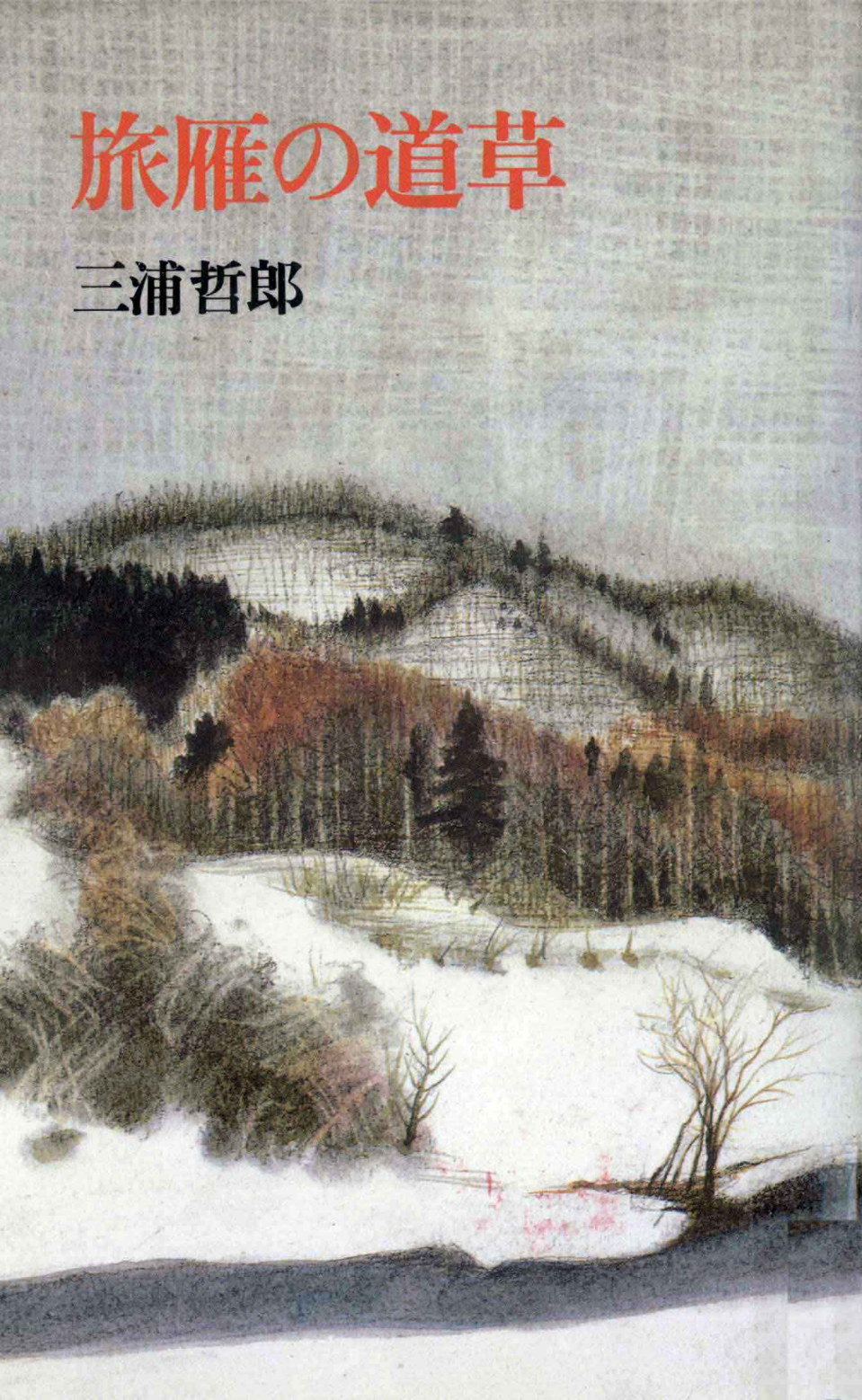
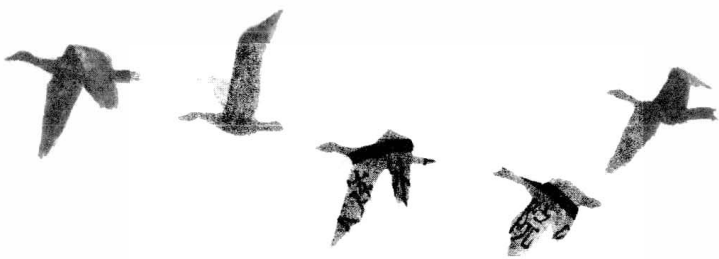
旅雁の道草

三浦哲郎



三浦哲郎



旅雁の道草（りょがんのみちくさ）
一九八四年四月二十日　第一刷発行
一九八四年七月二十日　第二刷発行
著者――三浦哲郎
© Tetsuo Miura 1984, Printed in Japan
発行者――加藤勝久
発行所――株式会社講談社
東京都文京区音羽二―三―二　郵便番号一二一　電話東京〇三―九四五―一一一一（大代表）　振替東京八―三九三〇
印刷所――信毎書籍印刷株式会社　製本所――藤沢製本株式会社
定価――一二〇〇円
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。
送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-06-201054-2(0)（文1）

目
次

風花の章……9
みみずくの章……27
夜船の章……45
タラッポの章……63
河鹿の章……81
野いちごの章……99

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

横笛の章……117
いさり火の章……135
秋月の章……153
落葉しぐれの章……171
卵酒の章……189
雪けむりの章……207
あとがき……225

装幀・絵　小松久子

旅雁の道草

風花の章

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

私は、この数年来、月にいちどは暇を見つけて北の郷里へ帰っている。時間の都合さえつけば、おなじ月のうちに二度も帰ったりするが、べつに、是非ともそうしなければならぬ用事が郷里で待っているわけではない。ただ、むこうの病院で寝たきりになっている老母の容態が気掛かりで、それでちょくちょく様子を見に帰るのである。

私のおふくろはいま九十歳だが、脳血栓で倒れて町の県立病院に入院してから、今年でもう五年目になる。倒れたという知らせを聞いたときは、二十年前に似たような病気で十日と保たずに死んだ父親のことを思い出し、それに齢も齢だから、そう長くは生きられまいと諦めたものだが、おふくろは思いのほか芯が強く、最初の危機を切り抜けてからはすこしずつ持ち直して、長期入院患者の仲間入りをした。

いまでは、左半身不随の寝たきり病人で、時折、原因不明の痙攣に襲われたり、どこから出るともわからない血を突然ごぼりと吐いたりして、周囲をあわてさせるが、もは

や元通りに回復するのは望めないにしても、病状はまず安定しているといっていい。口が不自由で、よほど馴れないと話す言葉が聞き取れないが、脳の血管をわずらっているにしては意識も確かだし、食欲もある。いつまでも円味の失せない頬には艶があり、握り返す手にも力がある。ただ耳だけは年々遠くなるばかりだが、これは齢のせいだから仕方がない。

おふくろは、青森県八戸（はちのへ）市の呉服屋の総領娘で、婿を迎えてからは暖簾を分けて貰って大通りにちいさな店を出していた。私が生まれたのも、少年時代を過ごしたのも、その家だが、終戦の直前、おふくろと姉とが艦砲射撃の噂に怯えて父親の生まれ在所へ疎開したのがきっかけになって、私たち一家はそれきり八戸市を離れることになった。父親の生まれ在所というのは、隣の岩手県との県境を越えてすぐのところにある温泉村だが、そこに八年住んだのち、世話をしてくれる人がいて近くの一戸（いちのへ）という山間（やまあい）の町に移った。いま、おふくろが入院しているのはその一戸町の病院である。

私は、生まれ故郷の八戸にいまでも強い愛着を抱いているが、父親の死後、若死にし

た姉たちの墓を八戸からこの町の寺に移してからは、ここを郷里と呼ぶことにしている。人口およそ二万と聞くが、国道沿いに古びた家並が細長くつらなっているだけの、市の立つ日でなければ真昼でも人通りの途絶えがちな、ひっそりとした田舎町である。町裏に迫っている山の中腹には急な石段を登る寺があり、その並びには昔の館跡もあって、子供のころに八戸でよく水浴びをした馬淵川の上流が、山間の底をうねうねと流れて町を横切っている。

おふくろが入院したあと、その馬淵川を見下ろす崖の上の家には、私のすぐ上の姉が独り残されて、町の子供たちに琴を教えながら暮らしている。すぐ上、といっても、私とはちょうど十歳違いだから、もう六十を過ぎているが、この姉は、生まれつき目が不自由で、病人の世話などしたくてもできない。それで、おふくろの看護は専門の付添婦に任せているが、その代わりに、姉は毎日、おふくろの好物を小鍋でことこと煮たり、焼いたりして、それをタッパーの弁当箱に入れて病院へ届けるのを日課にしている。

そんな独り暮らしの姉を慰めて、愚痴の聞き役になってやるのも帰郷の目的の一つだ

から、私はその都度、姉の好きな菓子を手土産にして出かけてゆく。急ぐときは飛行機で日帰りするが、そんなことは滅多になくて、まず大概は一と晩か二晩泊り。見舞ってみて病人の具合がよさそうだと、こちらも気が弛んで、つい炉端の酒を過ごすことになる。折角ここまできたのだからと、ついでに車なら一時間たらずの生まれ故郷まで足を伸ばして、子供時分によく嗅いだ鄙びた匂いのする道草を食って帰ることもある。また、時には市立図書館に閉じ籠って、神妙に調べものなどして帰ったりする。

ところで、今年は生憎、明けると早々に風邪をひき、そうでなくても遅れがちな仕事がいよいよ滞って、やっと帰郷の暇を見つけたときはもう月末近くになっていた。あまり時間の余裕がない上に、寒中だから、一と晩だけ泊ってくることにして、三十日の正午に出る新幹線の切符を買わせたが、その切符を点検しているうちに、ふと、そういえば四年前におふくろが発病した日も一月三十日だったと思い出した。

その四年前の冬も今年のような暖冬で、おふくろは、寒さしのぎに東京の私のところ

へ出てくる予定を取り止めにした。ところが、正月も終りごろになって、不意にきびしい寒波がきた。その上、間の悪いことに、大阪で猟銃を持った男が銀行に押し入り、大勢の客や行員を人質にして立て籠るという事件が起こって、その犯人を狙撃して逮捕するまでの模様が逐一テレビで放送された。たまたまそれを見てしまったおふくろは、その晩、一睡もできなくて、翌朝早く、床を離れようとして倒れたのである。

それが一月三十日だったことをすっかり忘れていて、四年後のちょうどおなじ日に、思い立って見舞いに帰ろうとしている。そのなにやら因縁染みた偶然に、私はちょっと驚いた。

新幹線が通って郷里も随分近くなったが、まだ馴れないせいか、やはり始発駅の大宮まで出かけていくのが億劫(おっくう)である。それに、私の住んでいるところから大宮へ出るには三種類の電車を乗り継いでいくことになるが、その乗り継ぎの連絡が大層順調なときとその逆のときがあって、一体どのぐらいの余裕を見て家を出たらいいものやら、いまだにわからないから困ってしまう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co